

# 県内ナラ枯れ拡大

16年度  
9市町に

## 伐採と活用進まず

### 原生林保全へ対策急務



まきや木炭などに加工するため加工所に積まれたナラ材。積極的に活用し、山林を若返らせることがナラ枯れ被害の防止につながる。葛巻町江刈

昆虫が媒介する病原菌でナラが枯死する「ナラ枯れ」の被害が県内で拡大している。1、2月に陸前高田市で初めて被害が確認されるなど、2016年度の被害は9市町に拡大。老木が被害に遭いやすいため伐採や植林を行い山林を若返らせることが重要だが、建築用材としての需要が高い針葉樹に比べ、広葉樹のナラの活用は進んでいない。被害拡大は新緑や紅葉など四季折々の彩りをもたらす、多くの生物を育む原生林の保全に影響を及ぼすだけに、根本的な対策が急務だ。

県によると、16年度は沿岸や県南の計9市町で被害が発生。被害量(民有林)は3105本で、14年度は1185本(同)の約2.6倍に増えた。県は本年度、ナラ枯れ対策予算を前年度比約370万円増の1657万円に増額。原因のナラ菌を媒介するカシノナガキクイムシが羽化する6月20日までに被害木を全量駆除するほか、周辺地域で被害木を早期に発見するため監視体制を強化する。だが近年は沿岸の半島伝いに被害が拡大するなど駆除が難しい場所もあり、完全な防除は難しい。



そこで県森林整備課の及川竜一整備課長は「高齢のナラほど被害に遭いやすい

**ナラ枯れ** カシノナガキクイムシが木の通水障害を引き起こすナラ菌を媒介する伝染病。ミスナラなどナラ類の健康な木に被害が集中しやすく、伝染すると木は茶色く変色して枯れてしまう。マツやスギには伝染しない。

ので、ナラの活用を上手に進めたい」と意気込むが、ナラ材の活用は林業政策の転換の中で減少傾向だ。かつては広葉樹を焼き木炭を生産するなどの循環サイクルが維持されていたが、00年代に入ると合板用材の需要が増えたことなどから、本県林業はスギなど針葉樹生産へと転換している。

岩手大農学部伊藤幸男准教授は「広葉樹は曲がっていて機械化できる部分が少なく、価格も低迷している。

## ガラス片で

岩手大内  
爆発事故

盛岡市上田の岩手大理工学部キャンパス内の地域連携推進センター棟で29日夜、同市のいおう化学研究

する。地方税法により、還



実  
市上田